

## 平成28年度岡山県子ども読書活動推進会議第2回会議の概要

- 1 日 時 平成29年1月31日(火) 10:00～12:00
- 2 場 所 県立図書館サークル活動室2
- 3 出席者 委員9名  
相賀委員、大村委員、門田委員、白神委員、塚本委員、坪井委員、  
徳山委員、行部委員、湯澤会長  
(福島委員欠席) (五十音順)

生涯学習課中本課長、齋藤総括副参事、和気主任  
岡山教育事務所 黒木副参事  
義務教育課 三宅主幹 高校教育課 岡本主幹  
報道なし、傍聴者なし

### 4 概 要

- (1) 平成28年度子ども読書活動推進事業について  
(事務局説明)

#### 質疑

- (委 員) 読書手帳についての説明があったが、現在の学校での活用状況についてお話をいただきたい。
- (委 員) 先ほど二極化という話が出たが、勤務校でも確かにそのように思う。書いてくる児童は、2冊目3冊目と読書手帳を記入している。しかし、読んだ本が10冊程度のため読書手帳に記入できない児童もいる。担任は、読んだ本を把握するために、宿題や長期休業中に読書の課題を出す時には、読書手帳に記入させ提出させるようにしている。本年度から読書手帳の中身が変わっていて、感想を記入する欄の罫線が薄くなっているため、印象に残ったシーンや主人公のイラストを描くことができ、その横に感想を書いている児童もいる。罫線を薄くしたことは、低学年の児童にとって取り組みやすくなっている。また、学校の主要な取組として図書委員会と連携して活用している実践もある。図書館のイベントの一つとして、読書手帳が一冊終わったらもう一冊券を渡すようにしている。読書好きの児童にとっては励みとなっている。
- (委 員) イラストやお気に入りの台詞を書いたりすることができるようになってるのは、感想やあらすじを記入することが苦手な児童の意識を、読書に向けるきっかけになるのではないだろうか。中学校ではどうだろうか。
- (委 員) 読書手帳を中学生に活用させるのは小学生と比較して難しいように感じる。中学校では、生徒の実態に応じて、多くの学校が朝学習か朝読書を実施している。中学校における読書活動は、委員会活動で取り組むことが多い。読書をする生徒は相当の量を読む。二極化は小学校よりも進んでいる傾向が感じられる。

- (委員) 本来、読書はプライバシーに関わることである。冊数など読んだ量についてはかまわないと思うが、委員会の生徒に自分が読んだ本がわかってしまうことをいやがる生徒もいる。学校司書がいれば、プライバシーへの配慮もできるだろうが、学校司書がない学校でもプライバシーについて配慮する必要がある。
- (委員) 勤務地の学校では、県作成の読書手帳と市が作成した読書手帳を配付しているが、学校図書館から借りた本は県作成の読書手帳に記入し、家庭や市町村図書館で借りた本は市町村図書館が作成した読書手帳に記入するといった使い分けをしている子どもがいる。多くの公立図書館では、読書手帳を作成しており、県と市町村作成分の使い分けができればよいと思う。
- (委員) どのような本を読むのかについては、プライバシーに関わる内容ではあるが、中高校生は友達同士で推薦し合う本を読みたくなるという傾向がある。バランスを取りながら取り組むことが大切である。
- (委員) プライバシーの問題があるということを知って読書手帳を活用しなければならぬ。手帳を配る際には、読んだすべての本を記入する必要はなく、友達に知らせたい本を記入すればよいという声かけは必要である。
- (委員) 中学生へ読書手帳の活用が広がるためには、中学生の興味が湧くような形式の物に工夫していけばよいだろう。
- (委員) 次に、「親子の読書活動ガイド」について議論していただきたい。現在、作成を進めているが、どのような願いをもって作成しているのか作成委員からお話いただきたい。
- (委員) これまでの子ども読書推進会議において、乳幼児期から絵本に親しむ土台作りについて課題としてなっていた。1回目の会議を7月の暑い日にもった。A3の表裏に思いや願いを詰め込もうということで、4人の委員で話し合ってきた。これまで、多くの乳幼児向けのガイドブックが作成されてきたが、これまでにないものを作ろうという熱い気持ちで取り組んだ。子どもの発達に即したかわりに視点を置いたガイドブックにしようということになった。それぞれの委員の立場から乳幼児期の親子の実態について話し合いを進めた。図書館の活用も重要なポイントであることについても確認してきた。発達心理学の専門の委員の意見を参考に子どもの発達時期を、年齢によって分けるのではなく、それぞれの発達時期の特徴で分けるという形式をとった。それぞれの発達時期の実態について、委員から意見をもらった。このガイドは、読書好きな子どもに育ててほしいという願いと子育て中の保護者や家族が、子どもにどのように関わっていけばよいのかヒントになればというコンセプトで作成した。家庭の中で、ふれあいやスキンシップの時間をたくさんもてるようなガイドになればとも思っている。
- (委員) 何か御意見はないか。

- (委員) 成長に応じた内容となっていることが分かりやすい。また、本の紹介もあるので、保護者にとって見やすい内容となっている。
- (委員) 家庭の支援の内容と言ったが、若い保育士に手にとってもらい、保育の中で活用してもらいたい。
- (委員) ブックスタート等で活用できる内容が凝縮されている。拡大コピーして掲示するのもよいのかもしれない。
- (委員) 司書・母親・父親が子どもと一緒に読んでいる、ふれあっている姿が写真で掲載されており、読んだ人が自分もやってみようという気持ちになってもらえる内容となっている。
- (委員) 父親・母親・子ども同士等、掲載する写真もよく選んでいると思う。
- (委員) 読書活動の二極化といわれているが、どのようにアプローチすればよいのかについては策が見つからないといったこともある。乳幼児期から言葉に関わる環境がこのような形で作られていくとよいと思う。配布先については、資料4に掲載してあるとおりで、他にも小児科等への配付も事務局は考えている。
- (委員) 小さい子ども向けの読み聞かせについてのガイドブックは山のようにある。その中で、どのようなコンセプトで、ガイドを作成するのかについてこれまで話し合ってきた。ガイドで4冊大きく紹介している本は、その発達時期の主人公が出てくる本を掲載している。この時期はこのような特徴がありますという内容を、専門的な立場の意見を交えながら子どもの姿をしっかりと伝えるようにした。紹介したい本はもっとあったが、紹介する本は最低限に絞っている。それよりは、子どもへのかかわり方や発達の様子を保護者に分かりやすく伝えたいと考えた。
- (委員) 配付されてどのような効果があったのかについては、今後、推進会議でも話し合っていきたい。次に、これまでの会議でも話題に上がっていたが、学校司書・司書教諭等の研修について、県で実施している研修や県立図書館が市町村に講師を派遣について資料5にまとめてあるので議論いただきたい。県立図書館の講師の派遣について、活用している市町村は、毎年継続して活用することになるだろうが、市町村への周知が十分ではないと、活用数が少なくなるということになる。県立図書館から補足があればお願いしたい。
- (委員) 岡山県総合教育センターにおいて、県立学校図書館職員研修講座に県立図書館から講師を派遣した。また、県立図書館では、図書館職員等研修講座を年間7回実施しており、その中の1回は昨年度話題になった児童書の紹介についての研修を行った。市町村立小・中学校や県立学校に案内を周知する研修は、この1回だけである。司書と教諭が62名と掲載しているが、教諭の参加人数は少なく、ほとんどが司書であった。講師派遣事業とは、県立図書館の職員が研究グループを作っており、それぞれのグループでテーマを決めて研究をしている。依頼があれば、派遣して研修を実施している。今年は、学校関係からの

依頼が多かった。ホームページで講師派遣事業について紹介しているが、公共図書館職員しか見ることができないため、学校に案内は行っていない。毎年研修を実施している市町村は、講師派遣事業のことを知っており、問い合わせがあれば、研修講座の内容についてFAXで送付している。講師派遣事業については、市町村立小中学校には案内が行っていないので、そのような事業があることを市町村の教員は知らないと思う。公共図書館職員や教育委員会から依頼はあるが、市町村立学校へは案内が行っていないので、依頼は少ない。

- (委員) 県立図書館の研究グループというのはどのようなものか。
- (委員) 県立図書館の職員が8グループに分かれており、各テーマに沿って研究を行っている。例えば、レファレンスのグループ、資料保存のグループ、著作権に関するグループなどがある。それぞれのグループで可能な講座内容を一覧にし、講師希望の依頼があれば職員を派遣するようにしている。
- (事務局) この資料は県が実施している研修のみを掲載している。市町村は独自で研修を実施している。
- (委員) 幼稚園・保育園は絵本自体が教材研究の対象となるので、保育士・幼稚園教諭を対象とした研修は多く実施されている。
- (委員) 事務局の話にあったが、市町村レベルで司書の研修が行われているということであった。充実した研修を実施している市町村もあるが、やっていない市町村もあり、格差があるというのが現状である。あまり実施していない市町村には、正規の学校司書がない、学校の規模が小さいため参加が難しい等の事情があるのは想像できる。研修についてだが、司書教諭に対する研修は弱いように感じる。多くの司書教諭から何をやったらよいかわからないという声をきく。司書教諭に関する書籍はあり、読めばわかるのかもしれないが、人のまねをして学ぶことが最初の段階であり、模範となる人のまねをして成長することができる。学校司書・司書教諭には模範としてまねをする人が目の前にいない。学校司書は、十分ではないかもしれないが、研修の場がある。司書教諭の研修の機会が少ないというのは何とかならないのだろうか。
- (委員) 前回の会議で高校は受験等があるため、読書を生徒が行うのは難しいという話があった。大学入試では、小論文対策等で本を読むことが求められている現状があり、どのようにして生徒を図書館や学校司書につないでいくかについて考えていかなければならないということであった。教育の現場もだんだんと変わってきており、学校司書の役割も変わってきていると感じているが、実感としてはいかがだろうか。
- (委員) 教員にもっと学校図書館を活用してもらいたいと同時に、司書教諭には、その辺りのことをもっと考えていただきたい。なかなか単純な問題ではないと思う。先ほどのお話の通り、受験には読書が必要である時代になってきている。だが、教員の中には、受験には読書が必

要であるという意識が薄いところがある。司書教諭による働きかけが必要であると感じている。

(委員) 岡山市の学校司書の研修は、全体研修、ブロック別研修等、充実している。小学校の教員は、学校図書館に関わるが、中学校は教科担任のため、極端に言うと、一部には、図書館の仕事は、国語科や社会科担当の教員がすればよい、自分たちは学校図書館に関係ないという意識をもっている教員もいる。

(委員) 将来、体育や音楽を専攻したいと思っている生徒は多い。そんな生徒には、ぜひ本を読んでおいてもらいたい。

(委員) 推薦入試で早く入学が決まる学生に関しては、入学前の事前教育を徹底している。具体的には新聞を読む、課題の本を読んで、意見をまとめるといったことを多くの大学が実施している。入学後には、図書館の活用方法、本の読み方、引用の仕方等について初年時教育を徹底して行う。現在は、スマホの台頭もあり、学生は、気軽にインターネットを活用して、引用を行うので、自分の考えを深めることができていない。大学に入ってから学び直しが必要となっている。

(委員) 大人の中に、本を読むということは、小説を読むことだという意識が強い。そのためフィクションを読んでいる子どもを読書家であると思いつく風潮がある。しかしながら、図書館の分類で考えれば、小説は、本当に狭い範囲である。哲学・自然科学等、図書館には様々な本がある。小学校の図書館でも、体育・理科等の様々なコーナーがある。ぜひ先生には研修において、「まずは自分が図書館を知る。」ということを行っていただきたい。先生が図書館とはどのようなところなのかわかっていないと、授業での利用もできない。校内研修の場で、図書館に関する内容を取り扱っていただきたい。

(委員) 子どもがどのような本が好きなのか、どのような読み方があるのかについて学びたいという願いをもっている幼稚園・保育園の職員は多い。教員自身が本を好きになり、本を通して子どもと一緒に楽しむことができるようになることはとても大切なことである。

(委員) 小学校や中学校にボランティアの方が入っているが、その場にいる先生が他の仕事に追われている現状がある。ボランティアの人が読み聞かせをしている時には、子どもと同じ目線で一緒に楽しむことが必要である。司書教諭の研修の機会は、難しいということがあるので、今ある環境を有効に活用し、ボランティアの人とのつながりにより、読書について学ぶヒントが見つかることもあるのではないだろうか。次に、県立図書館の機能を生かした子ども読書活動推進について御意見を伺いたい。

(委員) 学校図書セットの対象は高校生である。かなりのセット数を準備しており、テーマとして例えば、源氏物語、修学旅行東京編等がある。貸出ができるのは、県立学校だけとなっている。小中学校は対象となっていない。実際に活用しているのは、県立高校が多い。

- (委員) テーマにはおもしろいものがある。修学旅行東京編となると、東京に関する本を集めることになるのか。
- (委員) 東京の観光に関する内容の本が含まれている。
- (委員) 実際に、貸出をして、学校現場からのフィードバックはあるのか？
- (委員) 授業で取り上げる歴史上人物の本を授業で活用することがあるということだった。ただ、授業で図書セットを活用する時期が高校同士で重なるため、貸し出しができないこともある。
- (委員) テーマにつき各1セットしかないのか。
- (委員) テーマによっては、2・3セットあるのもあるが、同じセットを同時にすべて借りることができる。
- (委員) 次に、子ども読書活動推進連絡会を県立図書館が開催しているが、補足的な説明をお願いします。
- (委員) 年1回の開催であり、テーマに沿っての講演や情報交換、子どもの読書活動に関する文科省表彰小中高校・図書館・団体の実践発表を行っている。
- (委員) 次に、第3次岡山県子ども読書活動推進計画の評価指標の状況について事務局から説明をお願いします。

(2) 第3次岡山県子ども読書活動推進計画の評価指標の状況（事務局説明）  
質疑

- (委員) 文科省の調査からのデータであるが、数値が上がっているものもあるが、下がっているものもある。現状はどうなっているのかについて現場の先生から御意見をいただきたい。まず、学校図書館図書標準の達成状況、学校図書館運営計画等についてだが、横ばいになっている。また、学校図書館運営計画等については下がっている。実感はどうだろうか。
- (委員) 学校図書館運営計画等の26年度数値から28年度数値が下がっている。小学校の現場で考えると、一度作成した計画がなくなるという状況がよくわからない。普通は、昨年度の内容を加味して、計画を毎年更新していくことで、よりよい計画にしていくスタイルが普通である。
- (委員) 次の年度になって計画がなくなる、減るのはあまり考えにくい。
- (事務局) 記入した担当者によって解釈が異なり、このようなことになっているのではないかと考えられる。
- (委員) 学校現場では担当教員が調査を記入しているため、とらえ方のちがいがあつたのではないか。
- (委員) 次に、一斉読書の実施についてであるが、小学校、中学校ともに上がっている。中学校では、学校により朝学習・朝読書を選択しているということだったが、一斉読書について高い数字が出ている。小学校の数値も一層上がっているが、学校現場の中でも一斉読書をしていこ

うという気運が高まっているのだろうか。

- (委員) 本校では、毎日ではないが、朝読書を実施している。教材文に関連する作品を読む並行読書等、広く様々な本を読むことを大切にする授業の進め方が小学校では広がっていることが、子どもたちに読書を進めることにつながっていると思う。ただ、教科の復習の時間も必要となっており、本を読む時間を多く設定することができないジレンマもある。
- (委員) 中学校に関しては、平成22年度から比較すると、非常に数値が上がっているが、御意見を伺いたい。
- (委員) 朝読書か朝学習かということを先ほど話したが、子どもたちに任せる10分間の朝学習で学力が身に付いているのかという議論がある。はっきりしたことは言えないが、朝学習をしていた学校が読書の大切さについて考えてきているのかもしれない。
- (委員) 一斉読書は高校では難しいとは思いますが、現状はどうだろうか。
- (委員) 実施している学校もあるみたいだが、受験がある高校では難しい。
- (委員) 地元の中学校では、毎日朝読書を取り入れている。週1回と毎日では全くちがうだろう。
- (委員) 朝読書を取り入れている中学校は、毎日実施しているところが多いのではないだろうか。
- (委員) 一斉読書は、時間がだいぶ確保されてきており、指標の目標に近づいている。次に、公共図書館との連携についてである。小中学校ともに、もともと高い数値ではあったが、下がることなく、全国平均と比較しても高い数値である。公共図書館と学校との連携について、現状と課題について御意見を伺いたい。
- (委員) どの程度の連携であるのかはわからないが、勤務している市では、学校への団体貸し出し、年2回の会議等を実施している。他の市町村においても実施しており、市町村によって様々な連携があると思う。また、勤務している市では、学校司書が1校に1人の配置ではないため、学校司書からの要望は多い。学校司書からの要望があれば、公立図書館で対応できることであれば積極的にサポートしている。
- (委員) 県立図書館では、図書館セットの貸し出しがあるということだったが、県立図書館と学校との連携についてはどうだろうか。
- (委員) 県立図書館が直接、市町村学校と連携することはない。ただ、学校司書がない学校へ市町村図書館の司書が週1回、図書館の整備や読み聞かせをする市町村はあるので、市町村における連携は以前よりは少しずつ増えてきている。
- (委員) 県立図書館からの支援として、公共図書館からインターネット予約で県立図書館の図書を取り寄せ、学校図書館に貸し出すこともある。県立図書館からの支援はありがたい。
- (委員) 勤務している市では、学校間の横断検索システムを作っている。全国平均と比較して、図書館との連携の数値が高いことは、誇ってもよ

いことだ。この数値が上がったことの功労者は、県立図書館であると思う。県内どこに住んでいても読みたい本が、県立図書館からやってくる。そのようなシステムを県立図書館が作り上げていることは、大きな力になっていると思う。ただ、憂慮していることは、県立図書館の資料費についてである。現在は、資料費がある程度計上されているため、新刊図書が充実している。これが、市町村図書館へのバックアップにつながっている。資料費の予算が今後どうなっていくのか憂慮している。

(委員) 公共図書館との連携の数値が今後も維持されることを期待する意見が多く出た。最後に、ボランティアの活用についてである。小学校については目標を達成しており、中学校についても数値が高くなっている。学校現場の中に、ボランティアの方が入ってきているようだ。ボランティアの活用について御意見をいただきたい。

(委員) 岡山県において、読書支援ボランティアの学校支援内容として、読み聞かせが多い。全国的にみると、国は学校司書を設置するようにしているが、市町村は学校司書を設置する予算が少ないため、ボランティアで済まそうとしているところもあるという声を聞く。岡山市では、学校司書という図書の専門職員の主導のもと、ボランティアができることをしている。そうでなければ、ボランティアの好みによる選書が行われたり、子ども一人一人の本の好みについての情報が漏洩したりする危険がある。小学校にはボランティアが多く入っており、中学校にもボランティアが入ってきているが、中学生に読み聞かせが読書支援としてふさわしいのか考えなければならない。心を育てる、絆を深める、地域の人と交流するといった目的であれば、絵本の読み聞かせという方法もよいかかもしれない。それぞれの発達段階に応じたボランティアの読書支援内容を考えなければならない。

(委員) ボランティアが学校に入ることについて、ボランティアに期待すること等、御意見があれば伺いたい。

(委員) 勤務校には、市内公共図書館で活動しているグループと学区内で活動している2つの読書ボランティアが来てくださっており、ストーリーテリングや読み聞かせ等を中心に読書支援をしてくださっている。ボランティアの方は忙しい中、仕事の合間に支援をしてくださっている。ボランティアメンバーも高齢化しているという課題もあるそうだ。子どもたちは、とても楽しみにしているのだが、ボランティアの方に来てもらうのが当たり前になっているところがある。来ていただいているという感謝の気持ちを子どもがもてるようにしていかなければならない。指標の目標値の80%は、ボランティアの方に来ていただいているの数値であることを忘れてはいけないと思う。また、現在の学習の進行状況をボランティアの方と共有することで、学習の効果を上げるようにしている担任もいる。

(委員) 津山の方で、ボランティアの方と話す機会があった。学校の先生と

年2回、連絡会をもっているということだったが、そのような先生とのつながりは、子どもたちの実態に応じた選書が可能となるので、大切なことだと思う。中学生に応じた支援の方法があるということだったがいかがだろうか。

(委員) 中学生の発達段階を考えると絵本の読み聞かせが適していないことはない。非常に大切なことだと思う。ただ、中学校にはボランティアによる絵本の読み聞かせは根付いていない。国語の教員、学校司書の中には、読み聞かせは大切なことだとわかっている教員はいるが、できていない現状である。絵本の読み聞かせは、小学生であろうが中学生であろうが、大切なことである。

(委員) 中学生への読み聞かせとなると、読書につながる面もあると思うが、落ち着いた学校生活や地域の人となかよくなるといった目的の方につながっているのではないか。小学生であれば読み聞かせもあると思うが、例えば、地域の人との読書会や読んでいる本の紹介をし合う等の方法もある。読み聞かせが読書支援であるという考えを大人から変えていく必要がある。中学生に絵本を読むこともあっていいとは思いますが、中学生への読書支援はそれだけではない。読み聞かせを否定しているのではない。他のやり方も多くあるはずである。

(委員) 本を読んで語り合ったり、友達に意見をきいてもらったりする読書会は小学生でもできる。短時間の読書支援となると、ついつい絵本ということになってしまうが、自然を題材としたきちんとテーマのある絵本もある。また、家庭で読んだ本について語り合う、時間をかけて読み込まないといけない本については、あらすじを説明し、おもしろい場面のみ朗読するというスタイルも可能である。様々な方法を試していくことが大切ではないだろうか。